

生活に工夫とゆとり、地域に誇りと活力 多様性が特徴、「山形文化」

特集
座談会

国文祭を機に文化を考える

第18回国民文化祭が今年10月、山形県を会場に開かれる。気候風土などの影響を受けながら、生活、産業、芸術、学術、社会、都市や農村づくりなど、あらゆる分野の基礎にあるものが文化であろう。県内の各地域や各ジャンルで活躍されている6氏に参集願い、国文祭開催を機に「山形の文化」を語り合ってもらった。



石山 義信 氏

山形市生まれ。一橋大卒。県文化環境部環境企画課長、置賜総合支庁総務企画部長などを経て平成14年より現職。

最初に今回の国民文化祭の意味や、自身の文化観について。
石山 国文祭の歴史から紹介したい。昭和六十一年に作家の三浦朱門さんが文化庁長官の時に、国民体育大会は四十年近くやっているのに文化関係の大会がないのはおかしい。文化の国体があつてしかるべきということ。国民文化祭が始まったと聞いている。国民文化祭の意味は、文化活動をやっている方々が日頃の練習成果を発表したり、全国から集まる方々と交流し技術などのレベルアップを図ることにある。また、次の世代へ伝えていく役割もある。文化の底辺を広げるのが国民文化祭を開催する意義と考えている。もともと文化は常日頃の暮らしに潤いを与えるものである。不景気やイラク戦争やSARS騒ぎなどが起き不安や閉塞感のある時代には文化は

非常に元氣付けてくれるものではないか。国民文化祭でも、現在文化活動に携わっていない人を含め多くの方々に参加してもらいたい。県内の全市町村が参加する形での開催は今回が初めてで大きな特徴である。そして、今回は何をやるかを考える企画段階から市町村に参加してもらっている。市町村ごとに特徴ある取り組みができるものと思っている。
田中 県の意向を受けて三年前に国民文化祭企画委員会が組織され、何をやるかを考えることからスタートした。四十四市町村で八十一のイベントを行うことにし、各市町村に種目の希望を募り、話し合っ調整した。例

話し合った方々

ヴァイオリニスト	安部 敦子 氏
山形県国民文化祭推進事務局長	石山 義信 氏
財団法人本間美術館館長	高瀬 靖 氏
山形県芸術文化会議会長	田中 哲 氏
川西町教育委員会社会教育課社会教育係長	藤田 宿宣 氏
NPOもがみ理事長	沼野 慈 氏
(司会) 荘銀総合研究所副理事長	石川 敬義 氏

(五十音順)

えば、川西町は井上ひささんの劇団があるので演劇を、高畠町は浜田広介が生まれた所なので童話や児童文学のイベントを、大石田町や最上町は芭蕉の足跡がある関係で俳句を、短歌は斎藤茂吉の出身地の上市市でという具合にその土地の特徴を生かした割り振りを、次に各市町村単位に実行委員会を立ち上げて取り組んでいる。これまで芸術文化協会がない自治体が県内に三つあったが、今回の国文祭を契機に設置してもらい、四十四市町村全部に芸文協が設立された。県内全市町村に芸文協がある県はほかにないと思う。また、県芸文協には市町村のほかに、短歌、俳句、音楽など十六部門があり、その中に約三百の団体が加盟しており、それらの団体は各市町村に散らばっている。各芸文協はそれぞれの市町村とタイアップして国文祭を盛り上げていくことにしている。

高瀬 一例だが、国文祭を契機にして県全体の組織として琴と尺八と三弦の三曲協会ができて創作曲にも取り組んでいる。三分野の人々が一緒に発表できる場ができたことは画期的なことだ。これまで邦楽は、あまりにも



高瀬 靖氏

山形市生まれ。早稲田大卒。県立酒田西高等学校長、酒田市立光丘文庫長を経て、現職。日本詩人クラブ、県詩人会各会員。都山流尺八。

地味だったが、学校教育の中でも取り入れられるようになり、今回また国文祭が発表の機会となりうれしく思っている。また、これまでは庄内と内陸とが一緒になって発表することなどあり得なかったが、三曲協会ができたおかげで実現した。文化活動にとつて、精神的、時間的、経済的な余裕が最も大切だと思う。昔の酒田であれば本間家によって支えられた文化が、現代では地域の人々みんなが支えあっている。これはこれでとても良いことだが、内情はなかなか容易ではない。一方で、日本の文化行政のスポンサーシップはまだまだ弱い。もっと高い理念をもって文化行政に取り組んでほしい。

藤田 私は長年、川西町教育委員会で文化関係の仕事をしてきたが、今は芸術文化、文化祭等の担当をしている。昔から、文化活動というといつも顔ぶれが同じで、しかも若い人が少ない。若い人の参加が少ないのはなぜだろうと考えている。日本では学校で教育を受けている。学校が日本文化を教えないければ学ぶ機会はないのではないか。義務教育は特にその使命が大きいと思う。日本文化とは何かとなると、いろいろな考え方があろうが、豊も日本文化だ。その豊のある和室の使い方、床の間の使い方の方を分ける先生は今少ない。学校で床の間をどう用いるかを教えることが一切ない。日本文化を伝承する所が学校なのかどうかと考えているところだ。お茶のわびの文化は日本独特のものだ。昔からある日本文化を次の世代に伝えていきたい。私はお茶の教室を開いているが、その中で日本文化の良さを分かってもらおうと努力している。しかし、なかなか教える場所がない。和室がある

所がない。中学校の文化祭等で五、六年続けてお茶を教えているが、豊のある柔道場ついたりてを立てて会場にしている。掛け軸を飾る床の間はない。ある学校では床の間に春夏秋冬の掛け軸がすべて掛けられていた。床の間は、そこで季節感を味わったりする大切な場所だ。ある程度のゆとりが文化には必要なのかなとつくづく思っている。

沼野 文化という切り口で話をすると、自分とは関係ないとか、ゆとりがないとできないなどという声を聞く。しかし、私が新庄市の中心商店街の空き店舗を活用して地域サロンを開いていた時に、たまたま観光客が訪れ「ここで民話語りをしていると聞いたが、今日は聞けないですか？」と尋ねられた。その時、ちょうどサロンに居合わせた方が「絵本だったら読んであげられる」と言い、県内の民話を一気に三冊読んであげた。観光客の方は「すごい地域だ。偶然来たのにサツと読んでもらえる地域とは！」と涙をぼろぼろこぼし感激していた。その時、文化は日常の暮らしの中にあるのだと感じた。私は文化をこう考えている」と明確に意識することがないにせよ、人々の考え方や行動の基底に脈々と流れているものが文化ではないかと思っている。

自分の感性と対話しよう

安部 私は十五歳までの義務教育を日本ですごし、その後すぐウィーンの大学に入ったので、日本文化を学校教育で学ぶことは全くなかった。学校で文化を学んだり足りないものを補うことは非常に大切ではあるが、本来家庭で学ぶべきことが薄れているのであれ

ば残念だ。特に日本人としてのアイデンティティーをしっかりと身につけて大人になれないのは非常に危険ではないか。過去の歴史は文化が作り上げてきたと思う。政治でもなければ経済でもない。経済や産業が先走り過ぎた時に文化が軌道修正し再構築して歴史を作ってきたのではないか。文化というと、意味の分からないものという人もいるが、私自身は文化は生きていくことそのものだと思っている。ただ、分かりやすい形で表現すれば、衣食住の文化である生活文化、伝承文化である民俗文化、クオリティーの高いプロフェッショナルな文化という柱立てになっているのではないか。プロフェッショナルな文化でも、人々の高いクオリティーを求める欲求が底辺にあってこそプロフェッショナルな水準になっていく。文化を高めるには人々の文化意識を磨き上げなければならない。皆さんのお話を伺い、国民文化祭がそのきっかけになっていると感じた。文化意識を語る時に、私はよく自分の感性と対話をしようと言っている。感性を高めることで自分の文化意識が高まる気がする。そう考えると、山形は非常に魅力的な県だと思っている。まず、自然の美しさが私たちの心に、感性に語りかける。それらを受信する受信機をいかに感度よく保てるか、磨いていけるかがクオリティーを高める上で一番大事ではないか。そうした時に素材の魅力は捨てがたい。今後は独自の文化が求められると思うが、とかく「地域性のある文化」というと昔に固執しがちになる。鎖国時代の粋な文化もあるが、外来文化を取り入れる許容量の大きさの中から新たに生まれてきた文化も現代の美しい文化だ。異文化と

の融合がいかに文化を高めるかの視点も必要だ。
山形県の文化の位置付けをどう考えるべきか。

「水」を考える機会に

石山 二十一世紀は水の時代とも言われ、水についていろいろ考えなければならぬ時代となる。水と言えば、流域面積が県土の八割を占める最上川は山形県を支える川であり、歴史的にみれば文化の通り道でもあった。国文祭では川西町出身の井上ひさしさん特別プロデューサーをお願いし、水をテーマにして演出していただく。開会式で世界的なジャズピアニストの小曾根真さんが最上川舟歌をモチーフにしたピアノコンツェルトの創作作品を山響と共に演奏する。第二部では、井上ひさしさんが書き下ろした「水の手紙」を若男女が群読する。第三部は「水に遊ぶ」の題名でジャズダンスを披露する。閉会式では群読で「水宣言」をやることにしている。また、「水のアンソロジー」という本を作る。水に関する詩やエッセーなどを井上さんが集め、コメントをつけて三百ページくらいの本にする。山形で最初に出版し、国文祭終了後に全国版も出す。水にこだわった開会式や閉会式になる。水に関する多くの作品が国民文化祭を契機として創作され、これまでの国民文化祭とは一味違った内容になる。今年、世界水フォーラム^キもあつた。地球には十四億^キ、立方メートルの水があるが、そのうち飲める水は〇・〇一%、十四万^キ立方メートルだけだ。それは、世界の人口六十億人が飲む水の三カ月分に過ぎない。水は循環するので資源量として可変

性があるが、水不足になり水争いが起きかねない面もある。貧しい人ほど水にお金を多く払っており、そういったことを含めて今後いろいろ考えさせられる時代になるだろう。

山形県の文化の特性や課題は。

田中 私は、山形県は非常に多様な文化がある所だと自慢している。上杉藩、酒井藩などの藩文化が三百年以上にわたって土地に根付いて多様な文化を作ってきた。置賜、庄内など地域固有の文化が根付いている。例えば、地域ごとに謡曲がみんな違うのも面白い。山形中心が観世流で米沢が金剛流、庄内が宝生流である。藩が作り上げた伝統が各地に残っている。秋田県や宮城県は一県一国だ。山形県のように五つも六つも藩があつたところは珍しい。また、山形市は山形県の中でも独自の文化があまりなかった。町割は城下町の様相を見せているが、文化的には町人が幅を利かせた町人町だ。近江文化、商人文化が色濃く残っている。庄内は独特で庄内文化があり、置賜全域は米沢文化があり、最上地方は戸沢藩の文化、天童市は織田藩の文化、上市市には松平藩の文化があるという風に、藩の影響



田中 哲氏

山形市生まれ。國學院大卒。新聞記者、放送記者などを経てYBC、YTS、FM山形など放送業界に50年間従事。

を受けた独自の文化が残っており、こんな県は珍しいと思う。また、児童劇団が山形市にあるが、それも全国では珍しい。沖縄県と岩手県にもあるが、市が直轄するような形態の児童劇団は山形にしかない。活動を始めてから二十年になる。もう一つ珍しいのはドキュメンタリー映画祭だ。これは今年で十六年になる。演劇は井上ひさしさん直伝の門下生がたくさんいる川西町の存在がユニークだ。

本間家の思いが実現、公文大

高瀬 それぞれの地域にそれぞれの文化があり多様だ。私は内陸生まれだが、庄内に住んで感じるのは、漂流のこと。真壁仁の「日本の湿った風土」に稲作のことが出てくる。その稲作は、はるか南で生まれ、それが流れ流れて日本にきた。庄内の文化は、北のカムチャツカ半島から流れてきた文化と、南から上ってきた文化とがぶつかってできたと感じる。例えば、京風の文化が思いがけない形で残っている。庄内にはたくさんのお見事な雛が残っている。それは北前船で運ばれてきたものが多く、今や「庄内雛街道」として全国から観光客を集めるようになっていて。そして、それが最上川を通じて伝わり、それぞれの土地でまた独特の文化を作った。文化が互いに影響し合い、しかも独自のものを作っているところがすごい。また、空間的なことだけではなく、はるかかな時の流れを経てフイと芽を出す文化もあるのではないか。一七六五年に酒田の本間光丘という人が作った亀傘鉾を今年、酒田市が見事に蘇らせた。光丘は貴重なお金をかけ京都に発注して作らせた。その時、既に観光を考えている。祭りを見るため、た

くさんの船が酒田港に入っている。光丘の目の付けどころがすごい。今は閉塞の時代だが、それを打破するには人々が何を欲しているかを考える必要がある。それは公益を考えることに通じる。光丘はみんなのために何がやれるかを考え事業を大きくした。富を自分のものだけにしないで地域に還元し大きくなった。そんなものの考え方が彼の残した一番大きなタイムカプセルではないか。昔の人が築き上げたものをどう次代に伝えていくかは、われわれにとつてすごく大事な仕事だ。公益文科大学ができて本間家の思いが二百年経って実現した感じた。

藤田 置賜はほかと違う言葉遣いが非常に多い。まず、最上川のことを米沢では松川と言う。酒田から見ると一番末の方だから松川なのかどうか分らないが。昔は川が山形県の中心になっており、今の国道13号や高速道路の役割を果たしていた。また、置賜にのみ前方後円墳、前方後方墳がある。しかし、置賜の最大の特異性と言えは草木塔だろつ。草木塔はすべてのものに仏性があるという考え方に根差す。神仏は大きな木に宿ると考えら



藤田 宥宣 氏

川西町生まれ。種智院大卒後、醍醐寺管長の下で修業、昭和53年帰郷。下小松古墳群調査など担当。裏千家茶道助教授。

れ、伐採すればたたられるので供養しようと草木塔を立てた。江戸時代の中期以降のものが多く、川西町に二十基、米沢市に二十三基くらいある。さらに、行屋ぎやうがあるのも置賜の特徴だ。男の子が地域で一人前と認められるには飯豊山に登り米の収穫を祈願しなければならぬ。成人儀礼の一つであった。一週間ほどにこもって俗世界と異なる生活をした。二畳から四畳半くらいの小さな建物を川上に作り、水をかぶりながら山に登る。その慣習は戦前まで続いた。だが、川西町で百五十棟ほどあった行屋はほとんど壊され残っているのは五棟くらいだ。山に登るのは自然に生かされている自分を知ることだと思つ。置賜の文化として大事にしていきたい。

地域の資源を見直し価値創造

沼野 新庄・最上地方では自然と人が共生するモデル地域を目指すという気持ちだが非常に強くある。また、雪国文化と切り離せない地域であろう。雪によって与えられる生活の季節的なリズムがある。今は除雪が発達し移動が簡単だが、数十年前は移動が困難で冬は地域にこもっていた。雪の季節に醸成される細やかな心配りや助け合い、生活の知恵や工夫が、雪国の文化となつて引き継がれているのではないか。有名な新庄祭りも、五穀豊穰を願い長い冬に備えて「みんなでがんばろう」という思いが込められている。大変な凶作の時もあり、人々の気持ちを奮立たせるために二百五十年前から続いている祭りだと聞いている。雪国の夜の過ごし方として民話やワラや木工の加工、漬物の文化などもある。大人と子どものかかわりが強く、手遊びやわ



沼野 慈 氏

新庄市生まれ。福島大大学院在学中。新庄・護美の会副代表。県農業・農村政策審議会委員。県教育振興計画審議会委員。

らべ唄などの伝承もある。これらは雪に閉ざされていたがゆえに地域の文化として残ったと言っても過言ではない。巨木に対する畏敬の念もある。巨木のそばには神社が祀られ地域の人々を守り、吹雪の時の目印になったりした。そうやって大事にされ残ったものが現代になつていろいろ再発見され、地域の新しい価値を創っている。最近の動きとして環境芸術祭があり、新庄地域で七、八回開催された。奥羽山脈や田畑などの自然や地域全体がキャンパスになった。稲刈りをした後の田んぼでは、土とワラを使って芸術作品を作ると、冬には雪に埋もれてしまうが、春には元のとおり平らになつている。自然と一体になつた芸術作品を全国各地から訪れたアーティストと一緒に作る。農家のお母さんたちが炊き出しやいものこ汁を提供したこともあり、自然と人間と文化・芸術とを一体化してとらえるようにもなつた。さらに、蚕糸試験場があつたからこそバイオマスセンターの活動もある。「バイオマスセンターとともに歩むがみの会」という市民グループを組織している。これまで農業は、人のエネルギー源になる食

料を作ることが中心だったが、今車を走らせるエネルギー源の生産、緑の油田を試みている。新しい産業が生まれるのではないかと注目され、新庄・最上地方の新しい文化として期待されている。たくさんの人々をつなぎ新しい価値がづくり出せるとらえている。

安部 文化とゆとりの話があつたが、私がウィーンで真っ先に感じたのがゆとりだった。同じ二十四時間でありながら、倍ぐらい長い時間に感じる生活のゆとりはどこから来るのかを考えていた。文化が生活に不可欠であることを教育の中で子どもたちが自然に身に付けている。その雰囲気があるから社会全体にゆとりがある。仕事以外のところで自分を高めようと思う素地がある。戦後、ウィーンがどこから復興したかといえば、それは信仰心だった。食べるものを削つてもシユテファン寺院などを元通りに建て直そうとした。そういったことがゆとりにつながっているのかもしれない。ヨーロッパでは芸術家が大事にされる。日本では芸術家はどこかの組織に所属していれば安全な人間と思われるが、私のようにフリーで演奏活動する人間は「何者？」と警戒されがちだ。ヨーロッパの場合、芸術家にはプライドが与えられる。人々が生活していく上で自分の仕事にプライドを持つているから他を認めることができる。日本では行政上、文化は後回しにされてきたのではない。ヨーロッパでは文化行政は文化庁レベルではなく省が担当する。文化を教育の一部ととらえるのではなく人間が生きていく上で絶対に必要なものと考えられる。お役所の中に専門家がいて、文化を継続的に担当する。ウィーンは観光都市だが、芸術家を育てて人

を集めてきた。その歴史的な財産が今生きている。ウィーンには東欧の文化と南欧の文化が入り混じっている。それらを上手に洗練させてきた。山形でも多様な文化がぶつかりあつて花を咲かせたとあつたが、ウィーンでも山形と同じことがあつた。新しいものはモダンなものであるが、それが何百年か経た時に山形の文化として成り立つかもしれない。そういう思いでチャレンジしてもいいのではない。山形市の駅西に文化ホールを建設する計画があるが、その有効利用を考えただけでなく、産業芸術文化を進展させる視点だけでなく、産業発展を含めて考えたい。例えば、舞台美術、衣装、デザイン、音楽などすべてを山形のものを使うことにすれば、長い目で見れば赤字も黒字になるのではない。また、それが観光資源にもなる。観光資源になつたら次は農業とタイアップさせるといった大きな輪ができよう。同時に、川西町にあるような養成所を併設することも必要だ。ここで芸術活動ができることを見せるべきだ。日本では大学生でも自分が社会で何をすべきか分かつていない人が少ない気がする。幼少期から、大人が社会にどのようにかかわっているかを見ていれば夢も生まれてくるし目標も生まれるのではない。

これからの山形の文化をどう展望していくか。文化が盛んになる条件とは何か。石山 これからはソフトを考えていくことが中心になる。これまで行政は、ハードの基盤整備に重点を置いてきた。ソフトの部分の中心になるのは文化である。今回の国文祭でも、合唱団、ダンス、群読などで県民に参加してもらう。だが、応募してくれるのは女

性が多く男性は少ない。女性でも主婦だけが応募しているわけではない。練習は土曜、日曜は何か多くあるが、男性の場合は土曜、日曜は何か多くないでいたいのだろうか。文化に触れることによって仕事をやる上でプラスになるという気持ちになってほしい。これは文化だけでなく、NPOなど地域活動にも言えることだ。意識を変えていくことが非常に大切だ。今後は文化に触れる機会をできるだけ増やしていきたい。行政はソフトの部分に力を入れていかなければならない。

文化の中にある教育

田中 生活にゆとりを与えるものすべてが文化だと思っている。盆栽、カラオケなど趣味の文化や生活文化があってもよい。幅広く考えるべきだ。私は、文化の中に教育があると思う。だが、日本では教育の中に文化を入れてしまった。例えば、芸術性の高いものであっても、教育という名前で抑えつけてきた。教育の中に文化を閉じ込めようとするので文化が縮こまってしまふ。これは日本全体の問題だ。学校教育の中には音楽はあるが、演劇はない。私は演劇を教えるべきだと主張している。芝居がうまくなるのではなく、自己表現力を養うためだ。外国には音楽と同じように演劇の時間があるが、日本では音楽は教育だが演劇は教育ではないようだ。教育中心の考え方だからそうになる。国民文化祭を機会にそういった点を見直してもいいのではないか。

高瀬 お金もつけ、金銭至上主義がすべての価値基準の根幹にあるのではないか。お金より大切なもの、文化などが第一の価値とな

るべきではないか。そのためには、子どもに体験させることだ。スポーツ少年団は子どもにスポーツを体験させることで広がりがあった。何らかの形で子どもに文化に触れさせ、お金では買えない何かがあることを伝えていくべきだ。そのように子どもを育てていくことで、大人も次第に変わっていく方向を目指したい。むしろ、子どもたちに大人が教えてもらっても良いのではないか。

子どものうちから感動を体験

藤田 良いものを良いと分かる人間をいかに作り上げるのが大事だ。絵でも何でも「これは素晴らしい」と理解できなければ感動も何も無い。子どものうちから、良いものや感動できるものを与えると、興味が出てきて理解できるようになる。良いものを早めに子どもに触れさせる機会を作り、喜んで感動したりできる人間を育てることが、山形の文化を高めていくために大事なのではないか。

沼野 雪はやっかいな邪魔者といった画一的な価値観のもとで、これまで振り返られることがなかった雪国の質的な豊かさや文化が再評価されるべきだ。あらためて雪国に住むことの意味を見出していくことが地域の自信や誇りにつながり、人間力が回復するところに結びつくのではないか。NPOでは、大人の活動を子どもにも体験してもらおうと意識的に働きかけている。これからも続けていきたい。

安部 自然など感性に語りかけるものは子どもにとって大切な宝となる。山形の人は感覚的にクオリティーの高いものを持っている。それに気づかない面、あるいはそれを美



安部 敦子 氏

静岡市生まれ。山形市在住。国立ウィーン音楽大卒。1991年帰国、以後ソリストとして活動。エッセイ執筆等多方面で活躍。

徳としない面があるならば、早くそういうことから解き放ち魅力を最大限にアピールすべきだ。そして芸術家など高い文化意識を持った人を引きつけること。人が集まることで県民レベルでの文化向上を図ることができ。また、人を集めて終わるのではなく、文化を世界に発信する場を整えることも大事ではないか。生活のクオリティーを向上させる意味でも、カルチャーマネージメントする人材を育成する必要がある。人の前で何かを表現する時に、子どもが感じることができないものは人に伝わらない。頭で理解するのではなく、感覚的に感じ納得し表現できるように導いてあげることが必要ではないか。ヨーロッパとの差で言えば、日本では個人個人の判断をもっと大事にすべきだ。エゴイステックになる必要はないが、ピカソやベートーヴェンだから素晴らしいのではなく、その子がその時見たものや聞いたものに感動したならばそれを尊重することだ。個人的な判断ができる人間を育てていくべきだ。

ありがとうございます。